

# 与論島朝戸方言における 体言化表現法

町 博 光

はじめに

体言化表現法とは——体言主体の構文をとることによって、特殊な表現効果が醸成される表現のまとまり——を意味する。

名詞どめ構文に代表されるこの<sup>(注1)</sup>表現は、現在、共通語の書きことばなどでは、一種の文体的な効果をねらって用いられているにすぎない。ところが諸方言（とくに西部方言）では、その自在な造型が見られるのである。

南島方言においては、これが、文法上の著しい特徴の一つとして、しばしば指摘されてもいる。早くには、柳田国男の『海南小記』（「十九 小さな誤解」下）に、

（略）聴きたいをチ>ブシヤン、無<sup>(注2)</sup>いだらうをネランハジと謂ふブシヤンやハジも、「欲しい」と「筈」との中世の用の方の儘であるが、我々の俗語が却つて變つてしまつて、今では向ふの方（筆者注；首里語）の一つの特色と見られて居る。（傍点筆者）と記されている。

小論は、与論島朝戸方言（筆者の出身地）における、この種の表現法の実態について記述することを直接の目的とするものである。

実例は、音声記号で表記し、話部ごとの分かち書きにして示す。文頭には○印、文の終わりには・を付す。アクセントは、—符号を以て高音部を表示し、上昇調は—/で示す。共通語訳については、二段階に分けてこれを記し、逐語訳を< >でくくる。

## I

当該方言に認められる体言化表現法は、構文上から見れば、1. 接尾辞によるもの、2. 名詞どめによるもの、3. 準体助詞の使用によるもの——の3類型に大きくは分けることができる。

### I - A

まず、接尾辞が付加することにより体言化される構文を取り上げることとする。

接尾辞〔sa〕についての『沖縄語辞典』の説明を見ると、

—sa（接尾）よ。さ。述べることを相手に対して軽く強調する場合に用いる。「短縮形」（apocopated form）に付く。（略）

とあり、〔sa〕だけが特立され、それが、強調の機能を有することが示されている。しか

し、文表現について見る立場から、〔sa〕のみを分析的に扱うのではなく、文表現の直接的要素として、あくまでも文の中において扱っていくことにする。

以下に、当該方言における具体例を見ていく。

○ ŋju:nu ju:nu pikidju:sə.

<今日の 潮の 干き強さ。> (老男→複)

今日の潮のよく干いていたことノ

漁からの帰り道に、釣った魚を見せながら、あまりに潮が干き過ぎて(島は珊瑚礁で囲まれていて、潮が干き過ぎると魚が沖へ逃げってしまうので)、たいして釣れなかったと、よく干いていたことを強調して釣れなかった理由の説明をしている。

○ na:ma:ju:nu watabi:ŋju:nu watawassa.

<今頃の 童達の 腹悪さ。> (老男)

いまごろの子供達の意地悪いことノ

憤懣(ふんまん) やるかたないという顔つきで、詠嘆のこもった言いかたとなっている。

○ ʔupuwatənu jo:nisa.

<太腹の 愚かさ。> (中女) <テレビを見ながら>

大きな腹(をしたほうの人)の馬鹿らしいことノ

○ ʔənu munnu mai kote be:sa.

<あの 者の 米 食べ 早さ。> (中女→複)

あいつの飯の食いかたの早いことノ

いずれも中年の女性による実現例で、自分の感じたことを強調して述べたものである。

〔sa〕は、〔Sa〕の形で実現されることも多い。

○ ʔitabu:ŋontinu midgita:ʃə.

<永良部での 珍らさ。> (中男→複)

沖永良部島でのおもしろかったことノ

○ ʃi:fominu ʔumati ja:ʃa.

<広美の 生まれ やすさ。> (老女→中男)

広美(人名)の生まれつき(体格)の貧弱なことノ

○ tubakəʃi nata:ʃina:ju:ʃidu ʔutu:ʃə.

<飛ばかして 成らしなゆるのぞ 恐しさ。> (中男→複)

さっさとすましてしまえる人がえらいノ

〔sa〕〔Sa〕は、いずれも形容詞の基幹部分(たとえば終止形〔migitəʃən〕の〔migitə〕)について、話手の判断を軽く強調している。

〔sa〕〔Sa〕をとることにより強調された表現はまた、〔sa:]〔so:]の長音形をとることによって、いっそうその詠嘆の調子を加え、相手に対する訴えの効果を強める。

〔sa:]〔so:]は、本来は接尾辞〔sa〕に、それぞれ文末詞〔ja:]と〔jo:]がついたものと考えられる。

○ futəbjə: ʔikitəʃassa:.

<此度は 少なさ。> (中男)

今年は（収穫が）少ないだろう。

砂糖きびの出来がよくないので、今年はたいしたことは望めないだろう、とため息まじりに推測しているのである。

○ *muttu ja:si:kunnessa:*.

<まったく 易くないさ。> (中男→同女)

ぜんぜん簡単じゃないぞ。

たいしたことはない、という前評判だった仕事を、実際にやってみると大変であることがわかり、おもわずこのように言ったのである。

○ *?utu:fu:ji: munu ?essa:*.

<恐ろしい 物 ださ。> (老男→複)

すごい物だわい！

〔*?essa:*〕は、助動詞「だ」に相当する〔*?ei:*〕に〔*sa:*〕が付加して促音化したものである。

次に〔*so:*〕の例を見ていく。

○ *wai: nu:ga wu:gan du:so:*.

<ワイ 何が 拝み 遠そ。> (青男→同)

あれ、ずいぶんひさしぶりだな。

お互いに、この前、顔を〔*wu:gan*〕（「拝む」）でから、ずいぶん〔*du:sa*〕（「遠く」）になったと言うのである。

○ *qju:dakjantju: go:go: ni:buti mi:tjaso:*.

<今日だけさえも ゴーゴー 寝むって みたさ。> (中女→青女)

今日だけでもぐうぐう寝てみたいものだ。

○ *hassaji gosjaku?en ja: nu:ga takaso:*.

<この量で 500円 ヤー。何が 高さ。> (初老男→中女)

たったこれだけで 500円ね。なんと高いこと。

〔*sa:*〕が、自分以外の外界の事物や事象についての客観的判断の強調をなすことが多いのに対し、〔*so:*〕は、主観的な判断や願望などの強調をなす場合が多い。これは、文末詞の〔*ja:*〕と〔*jo:*〕の機能上の差に基づくものと考えられる。

## I - B

〔*sa*〕によって体言化される構文に対して、ここでは〔*Si*〕によって体言化されるものを取り上げる。

○ *qandun ?itji?wanno: mi:pitafo:kufi.*

<そうども 為ておはすなよ。見汚なくし。> (中女→老女)

そんなことなどしないですよ。見苦しい。

文意は、「決してそんなことなどしないでくださいよ。見苦しいんだから。」ということである。強く自分の感情を表に出すことによって、それがまた相手への行動禁止の理由に

なるのである。

○ ʔatʃi:kuj̄i. jaːdunaga ʔaiki..

<暑くし。窓など 開けれ。> (中女→筆者)

暑いこと。窓など開けなさいよ。

「暑いこと」と強調することによって、「こんなに暑いのに窓もあけないのか」という、話手の不満の表明となっている。

○ duk̄u nakuna. janaḡikuj̄i.

<ひどく 泣くな。汚くし。> (初老女→幼女)

あんまり泣くな。うるさいこと。

これも、「うるさいこと」と強調することによって、「うるさいのに、まったく」と、いらいらした気持ちがよく言い表されている。

○ j̄un̄nakatʃitʃi jaːn. miziːʔaj̄ikuj̄i. nuːdu ʔajuːkutʃa: neː..

<世の中で言って ヤン。珍らしくし。何ぞ 有ゆるとは ない。> (老男→複)

ほんとにねえ。おもしろいものだ。(世の中には)何が起るかわかりはしない。

○ Funu tata. joːnikuj̄i. tonton kuː..

<この太郎。愚かしくし。さっさと 来い。> (中男→青男)

このタラ(人名)。ばかなこと。さっさと来い。

2例とも、自分の判断を強調した言いかたである。

〔sa〕が、サアリ系形容詞の基幹部分について、事態の様子についての判断を強調するのに対し、〔si〕は、クアリ系形容詞のク連用形につき、自分の思いを直接的に強調するものである。したがって、〔si〕による体言化構文は、<sup>(注4)</sup>訴えの効果が一段と強くなり、しかもほとんどが1話部だけからなる短文であるために、いっそう強調的なもの言いとなる。

## I

藤原与一先生の『日本語方言文法の世界』(P.85)に、

(略)そこでは、たとえば与論島で、

○ ニャー ネチャ イザランヌ パジ。

[ ɲaːneʧaiz̄aŋan̄up̄aʒi ]

……(1)  
(註5)

もう熱は出ないだろう。

(中略)南島方言では、このように「出ないだろう」と「未来」時に言ってよいところを、その表現の文法手段はとらないで、現在法の言いかたをして「出ない筈」と言いあらかず。このような表現方式の名詞構文は、体言どめと言えるものの中でも、かくべつ注意されるものである。

とあり、この種の表現への指摘がなされている。当該方言では、この「パジ」のほかにも、いくつかの名詞どめ構文が見い出される。

I - A

まず、強調表現をしたてる〔kutu〕〔munu〕から見ていく。

〔kutu〕(「事」)で終わる名詞どめ構文は、

○ to:tu. jāgumisatu putu.

<尊し。恐れ多さる こと。> (老女→青男)

ありがとう。もったいないことだ。

○ hadamju:tu puta: tʃa:ki munuwugangutu.

<怒る 事は まったく もの拌みごと。> (中女→複)

怒るさまはほんとうに見物ものだ。

のように、「こと」の原義がすぐにわかる強調表現に用いられることが多い。

〔kutu〕には、この種の強調表現のほかに、

○ tãndi tʃo: . hagamju:kutu. (中女→青女)

<お願い チョー。拌むこと。>

お願いよ。頼むから。

○ mattʃuti. mattʃuti. ko:ju:kutu.

<待って。待って。食べさせること。> (中女→幼女)

待ってて。待ってて。食べさせるから。

のように、接尾辞的に使われる用法も多い。

『沖縄語辞典』では、この〔kutu〕を接尾辞として扱い、「から。ので。理由を表わす。活用する語の『短縮形』(apocopated form)につく。(略)」と説明している。当該方言の文例でも、いずれも「短縮形」(たとえば〔ko:sun〕の〔ko:su:])についていて、いわゆる連体形接続の名詞どめではない。が、むしろ、このような〔kutu〕の原義が失われた表現にこそ、南島方言における体言化表現法の独自の広まりを見ることができると考える。

I - B

〔munu〕は、事態・対象への反撥的なもの言いをしたてる。

○ ʃi:po:ju:tu munu.

<やりよる もの。> (中男→少男複)

よくやるよ。

あきれ返った口調で、「お前ら、よくそんなことができるな。」と言いかけているのである。

○ jo:ninu būtinu ?ābiti ?aikju:tu munu.

<馬鹿の 群れの 叫んで歩く もの。> (初老男)

馬鹿な連中の騒いでいること。

初老の男子が、酒を飲んで騒いでいる連中を見てあきれ返り、「よくあんなことができるよ。」と客観的な冷やかな目で見下しているのである。

(註6)

○ najun tibo. tja:kote de:tu munu.

<成ゆん て言え。いつも食べである もの。> (中女→老女)

いってば。いつも食べているんだから。

孫にお菓子を買ってあげようとしている老母を、母親がとどめているところである。

〔tja:kote.〕(「いつも食い」)は、一語として認定できる。

文末にくる〔munu〕には、他の文末にくる名詞と違い、文末詞化の傾向がうかがわれる。

○ Fufusatukati ʔikibo:ʔe:tatu munu.

<古里に行けばだったもの。> (青女→中女)

古里(地名)に行くとけばよかった。

家でのおんぴりしていたかったのに、こんなに仕事をさせられるなら、いっそ古里に遊びに行けばよかった、とぼやいている。

○ mukaja: ʔitʃiban tʃufakuʔe:tatu munu.

<昔はいちばん 清くだったもの。> (初老男→青男)

昔はいちばんきれいだったのに。

昔は前浜(浜の名称、沖繩本島を望む景観地)が、島でいちばんきれいだったのに、ずいぶん汚れてしまった、と慨嘆している。

○ ʔujakamiganasinu ʔuma jutusunatʃi ʔe:tatu munu.

<祖神加那志の そこ 許すなて おっしゃったもの。> (中女→榎)

祖神様(先祖)が、《遺言》でそこ(田んぼ)だけは手放すなとおっしゃっていたのに。

あれだけ強く言われていたのに、とうとう手放すのか、という不満の気持である。

〔ʔe:〕は、「言う」の尊敬動詞〔ʔe:n〕の連用形である。

○ ʔutʃikutʃiban naju:tu munu.

<打ち殺しばも 成ゆるもの。> (中男→同)

ぶんなぐればよかったのに。

「～すればいいのに」という強烈な自己主張の例である。そうとうに強い言いかたで、話主の憤(いきどお)りが〔munu〕によって、よく支えられている。

以上、見てきたように〔munu〕をつけそえることによって、話主の立場をあきらかにし、微妙なニュアンスを与えていて、文末詞かとも考えられる。しかし、例文としてあげた〔munu〕は、いずれも連体形に接続している。一文は、連体形〔-tu〕までで状態修飾語部となり、〔munu〕にかかって名詞どめの形をとることで安定しているのである。いずれにしろ、文末に位置して体言化表現法を構成する名詞のうち、〔munu〕だけがなぜ文末詞化の傾向をたどるのかという問題は残る。

当該方言の〔kutu〕〔munu〕どめの構文には、強調表現をこととする体言化表現法一般の様相が見てとれ、さらに新用法をも派生しているのである。

II - C

次に、感動表現をしたてる〔pjo:ʃi〕を見て行こう。

〔pjo:ʃi〕は、「拍子」からの変化形だと考えられる。用例を検討して見ると、

○nacc̄aiga kurt̄ej̄it̄jatu pjo:ʃi.

<あの二人が くっ着いたる 拍子。> (老男)

あの二人がよく結婚したもんだ。

のように、話手の驚きを示している。これは結婚した二人についての噂話であり、二人がくっつくなんてぜんぜん予想もしなかった、という予想しなかったことが起こった驚きが〔pjo:ʃi〕でよく言いまとめられている。

○ʔaŋiŋ ḡaʃi ʃi:nat̄atu pjo:ʃi.

<あれも そうして 為成たる 拍子。> (中男→青男)

彼もまあよくできたもんだ。

「彼も三味線が弾ける。」という話を聞いて、「へえ、そうか。あいつも弾けたのか。」といった自分自身を納得させるようなとつとつとした言いかたである。〔gaʃi〕(「そうして」)は、聞いた内容を指すよりも、むしろ間投詞のように用いられ、文全体を自分自身に言い聞かせるような調子にしたてている。

○ʔat̄at̄atu pjo:ʃi.

<当たたる 拍子。> (中女→同)

よく当たったもんだ。

自分自身、当たるはずがないと思いながら言ったことが、たまたま当たった時の驚きの表明である。

○ḡaʃi jut̄aʃan paiʔo:t̄atu pjo:ʃi.

<そんなに うまくに 行き合ったる 拍子。> (中男→青男)

そんなにうまく行き合ったもんだな。

帰る途中で、うまく知人の車に行き合ったので乗せてきてもらった、という話を聞いたことに答えて表現されたものである。

II - D

次に、説明表現をしたてる〔waki〕と〔tʃimui〕どめによるものを見ていく。

〔waki〕(「訳」)どめの名詞構文は、詠嘆をこめた説明表現に多用されている。

○puiwulaʃit̄atu waki.

<吹き折られたる 訳。> (中女→同男)

(その木までもが) 吹き折られたのよ。

台風があまりに強かったので、裏の木も折られてしまった、とあきれ顔で説明している。

○Fune:ti nat̄at̄jatu waki.

<こらえて 成らしたる 訳。> (青男→中男)

こらえてすましたわけよ。

いろいろ言いがかりをつけられ、悔やしかったけれどもこらえた、という昂ぶった気持ちでの説明である。

○ *mittān haḥa:sa ju:tu waki.*

〈めっそう 辛さ する 訳。〉 (中女→同男)

とつても辛いわけよ。

これは、料理を勧めながら、塩を入れすぎて申し訳ないと弁解している場面での表現である。

○ *wa:ʃagafidakja: na: waka:ju:tu waki.*

〈私たちがのだけは もう わかる 訳。〉 (青女→複)

家の者だけはもうわかるわけよ。

子供らが5・6人いたずらをしている所に、話し手が通りかかったらあわてて逃げていった、という話をしている。逃げていった子供らの中に、家族の者がいて一目散に逃げ去ったが、毎日顔をつき合わせているのだから、後姿だけ見れば誰であるかがすぐわかったというのである。

## II - E

○ *kumpātu ʃimui.*

〈頑張ったる 積り。〉 (青男→同)

がんばったつもりだ。

のように自己の思いを強調して述べる表現をしたてる。〔*kumpajun*〕とは、「踏んばる」の意でもあり、「頑張る」の意に普通に用いられる〔*kibajun*〕(「キバる」)よりも、よほど強調的に用いられる。この語と呼応して、一文はまた〔*ʃimui*〕でとめる名詞構文となり、さらにいっそう話主の心意を強調する表現となっている。

○ *jaḡati mudju:tu ʃimui.*

〈やがて 戻る 積り。〉 (青男→同)

やがて戻る積りだ。

○ *ʔida nata:ju:tu ʃimui.*

〈早く 成らせる 積り。〉 (中男→複)

急いですませるつもりだ。

2例とも、自己の予定を強調して述べたものである。

○ *ʔunu ʃimui.*

〈その積り。〉 (青男→中女)

そのつもりだ。

○ *ʔataime: . ʃa: tudiki:nu ʃimui.*

〈当り前。しよっちゅう 飛んで来の 積り。〉 (中女→同)

あたりまえだ。しよっちゅう飛んで行くつもりだ。

格助詞〔*nu*〕(「の」)に接続した例である。これを、文構造論的に見ると、〔*nu*〕まで



で文意はいちおうまとめられ、全体が状態修飾語部となって〔tSimui〕にかかっていく構造となっている。「その心づもりでおれよ。」と言われたのに答えて、「当然そのつもりだ。言われるまでもない。」と、少し反発のこもった言いかたをしているのである。後例も同様に、「たまには遊びに來い。」と誘われたのに対して、軽く反発しながら答えたものである。この例で、「飛んで來る」のは、話し手自身である。相手の立場に立つと話し手が「飛んで來る」ことになるのである。

〔tSimui〕どめによる構文は、話し手の心情を強調して説明するのに効果的だが、ややもすれば反発的な感情を伴ふものになる。

## I - F

〔tSimui〕〔waki〕が感動あるいは詠嘆を表していたのに対し、以下の諸例は推量・推定を表す。まず、〔paʒi〕の例から見ていく。

○ pa: jaʒati kju:tu paʒi.

<もう やがて 來る筈。> (青男→同)

もうすぐ來るだろう。

○ pa: naʒaʒidu ʒiʒatu paʒi.

<もう 済ましぞ 為たる 筈。> (中女→同)

もうすましたらう。

いずれも〔paʒi〕が、状態修飾語部を受けて、名詞どめの構文となっている。〔paʒi〕と言いとめる断定的な口調は、「きっと～だろう」という確信のこもった推量の表現心意を譲成している。

○ nanduʒadja: ʒamaʒannu paʒi.

<なんぞまでは 余らぬ 筈。> (中女→同)

たいしてあまらないだろう。

○ ʒaʒinja hanoʒannu paʒi.

<あれには 叶われぬ 筈。> (中男→同) <相模を見ながら>

あいつにはかなわないだろう。

2例ともに、否定辞〔nu〕に〔paʒi〕のついた例である。

## II - G

〔gi:] は、「氣」からの変化形と考えられる。

○ ʒumanaija pa ʒaju:tu gi:.

<そこには まだ 有ゆる 氣。> (初老男→中女)

そこ (の店) には、まだ (品物が) あるらしい。

店に行き、買いたい品物が売り切れになっていたのに、通りかかった人がその品物を持っていたので、こう推量したのである。

○ watabinʒja: tʒiʒi nakaʒatu gi:.

<童達で 言って。泣かしたる 氣。> (中女→複)

子供達って。泣かしたんだろう。

子供達にあずけていた幼児が、一人で泣いているのを見ての表現例である。「子供達ってまあほんとにしようがない。放っというて泣かしてしまっただろう。」という気持である。

○ *tʃa: masamunu kote ʔe:tu gi:.*

<いつも 御馳走 食べ である 気。> (老男→中男)

ごちそうばっかり食べているんだろう。

ひさしぶりに里帰りした人に向かって、その体格の良さを目の前にしながら、なかばおどけ気味にこう冷やかしている。

○ *naʔatʃatu gi: . haʔadʒiki paʒimʒui do:.*

<成らしたる 気。片づけ 始める だー。> (中女→複)

すましたらしい。片づけは始めるよ。

これは、隣りで仕事をしている人達が、あと片付けを始めたのを見て、仲間に「もうすましたらしいぞ。さあ、こちらも急ごう。」とせかしているところである。

〔paʒi〕が、確信をこめた推量表現であるのに対し、〔gi:〕は、客観的な事実に基づいて、「～の様子だ」と推定する表現をしたるものである。

以上、〔kutu〕〔munu〕が、本土方言と同様、強調・詠嘆表現をしたてていることを見、さらに〔pjo:ʃi〕以下、感動・説明・推量など多岐にわたる特殊表現をしたてているさまを見た。当該方言におけるこの種の表現の盛んなさまが見てとれたかと思える。

ここで注目して置きたいことは、名詞どめ構文を形づくる形式名詞は、〔pjo:ʃi〕〔gi:〕を除いて和語系のものであるということである。体言化表現法がきわめて日本的なもので、こういうものには漢語が入りにくかったということであろう。いずれにしろ、この種の表現の古態性を思わせてくれるものである。

## II

体言化表現法の第3類型として準体助詞の使用によるものが取り上げられる。これはさらに、準体助詞〔ʃi〕の使用によるものと、準体助詞〔ga〕が、〔gane:〕の熟合した形で用いられるものとに分けられる。

## III - A

準体助詞による体言化表現法とは、文中において、準体助詞を使用することにより、その位置する部位までの表現に、一定の意味のまとまりを持たせ、一文に断定的な表現効果を醸成する表現法——と定義できる。

準体助詞「ト」の性格について、愛宕八郎康隆氏は、「肥前長崎地方の準体助詞『ト』について」(『長崎大学教育学部人文科学研究報告』第25号)の中で、

結果的に言えば、準体助詞「ト」で表現されたものは、視覚的にであれ、観念的にもあれ、まとまり性を持つということであろう。

このような「ト」の性格を、「ト」の結靡性（ひいては、準体助詞の結靡性）と呼ぶことにしたい。

と述べていられる。

当方言の準体助詞〔Si〕も、

- *ṽinsaji:ja juku māku da:*.  
＜小さシは かえって おいしく ダー。＞（青女→同）  
小さいの《みかん》は、かえっておいしいよ。

- *pa:jiminu:jin mā:djin pafo:tukan.*  
＜始めのシも 一緒に 払とかむ。＞（青男→中女）  
このまえの《品代》も一緒に払とこう。

のように、準体助詞の基本的な性格である、体言そのものに相当する役割をはたしている。

- *de: tʃa:tʃu:ʃinaga nudimjan.*  
＜さあ、お茶で言ふシなど 飲んでみむ。＞（老男→中女）  
お茶と言ふものなど飲んでみよう。

お茶を飲みたくなくて、直接お茶を飲もうとは言いにくいので、このような婉曲な言いまわしをとって相手を促しているのである。

- *ta:ga: tʃanagitaʃiga ʔe:ta.*  
＜誰が 投げたシが だろう。＞（老女→中女）  
誰が投げ捨てたものだろうか。

〔tʃa:tʃu:ʃi〕といい、〔ta:gatʃanagitaʃi〕といい、いずれもこれだけで「ままとまり性」を持っているのである。

以上、準体助詞〔Si〕が、体言相当の役割をはたしているものと、その位置される部位までの意味をまとめているものを見た。いずれも〔Si〕によってまとめられ、そこに一種の軽い断定が見てとれるのである。

『沖縄語辞典』では、〔Si〕を、「九州諸方言の助詞『と』『て』、山口県方言などの助詞『そ』と比較される。」として、〔Si〕が、九州方言（ひいては山口県方言）とのつながりを有することが指摘されている。

### Ⅲ - B

準体助詞〔Si〕に比べて、〔gane:〕はよほど固定的に用いられる。〔gane:〕を分析的に見ると、準体助詞〔ga〕と形式名詞〔ne:〕（「様《よう》」）が結合してできたものと考えられる。

- *nū:jin kamangane:ʃi ʔikju:tan da:*.  
＜何にも 喰ま《ない》がようにして 行った ダー。＞（青女→中女）  
なんにも食べないで行ったよ。

〔nū:jin kamang〕（〔ŋ〕に否定の意ありか）までで、文意はいちおうまとめられている。それを〔gane:〕が受けて、体言的にまとめあげ、さらに下位の表現へと続けていっ

ている。この文で話主のより相手へ訴えたいことは、「行った」ことではなく、  
〔gane:] の上部表現——何にも食べなかった——ということなのである。

○ Fumin mata ʔatongane:ʃi ninti jo:.

<米も また・洗わんがようにして 寝て ヨー。> (中女→同複)

米もまた洗わずに寝てしまってねえ。

このごろ疲れているので、昨夜は、食器洗いはもちろん、今朝のお米さえも研がずに寝てしまった、と嘆息しているのである。〔gane:] の上部表現は、「お米も研がず」と文意がまとめられていて、お米さえもという軽い強調の心意が加わっているのである。

○ nuttʃim mangane:ʃi hacamike:ʔaʃui ʔute:.

<何でも 思は《ない》がようにして 担ぎ返らせる ウレー。> (中男→複)

平気で担ぎあげてしまうよ。

いずれも〔gane:] で文意をまとめあげ、連用修飾話部として下接の述話部へとかかっていっている。

○ takasangane:ʃa: mja:ʔagi.

<高いがようにしては 見えらじ。> (老女→背男)

(背が) 高いようには見えない。

○ wa:ʔaga wa:ʃibo: ko:kjungane:ʃa ne:.

<私たちが 沸かせば 食べられるがようは ない。> (青女→中女)

私たちが (料理を) 作っても食べられやしない。

○ ʔuku ko:kjungane:ʃa ne: do:.

<あんまり 食べられるがようには ない ドー。> (中男→同女)

あんまり食べられそうにはないぞ。

いずれも、〔gane:] までが状態修飾話部として働き、述話部へとかかっている。述話部は、これを否定辞で受け、短く言い切って一文を簡潔にまとめあげている。しかも後の2例は、〔ne:jane:] と〔ne:] を呼応させ、音声的にも緊張を保たせている。このような簡潔に言いまとめられた一文には、何らかの強調心意が認められるのも当然と言えよう。

#### IV

I～IIIにおいて、与論島方言の体言化表現法の諸事象について見てきたが、これらはいずれも、九州方言(ことに中南部以降)に、その流れを辿ることができる。

ここに藤原与一先生の『日本語方言文法の世界』から、例を引かせていただく。Iの接尾辞の付加したものと、

○ カジェン サムサ。 [ kʌʒensʌmʌsʌ ] ……(2)

まあ、風のさむいこと、ノ <ひとりがたり>

○ キョーン アッサー。 [ kjo:nas:a: ] ……(2)

まあ今日の暑いことったらねえ、

を示していられる(同書P.69)。IIの名詞どめによるものについても、

○ ミナ ヤマン ホーイ ニゲカタ。

[minajamarho:inige kata.] ……(2)

みんな山の方へ逃げるのだった。

などを示してられる。Ⅲの準体助詞の使用によるものについては、前掲の愛宕氏の御論文や『沖繩語辞典』の指摘などにより、その流れを辿ることができる。

このような事実を前にして、私どもは、とかくこれまでないがしろにされていた、南島方言と九州方言とのつながりを色濃く感じることができる。南島方言と九州方言古系脈とのこのような表現法上の基部における似通い現象の解明は、今後とも追求して行くべき大きな課題であると考ええる。

### おわりに

以上、与論島朝戸方言における体言化表現法を3類に分けて報告し、それが、九州方言とのつながりを有するものであることを見てきた。取り上げた一連の事象が、九州方言とのつながりを有するものであるとしても、当該方言において、今なお遺存度が高く、その用法も多岐にわたり、日々の表現生活の重要な支えとなっている点で、その独自性は顕著である。

体言化表現法は、南島方言文法の一特質として改めて指摘されてよからう。

(注1) 安達隆一氏「体言化表現法としてみた『ク語法』について——特に文末用法の場合——」(『水門』9)

(注2) 藤原与一先生『日本語方言文法の世界』(P.69)などの御記述でそのことが見てとれる。

(注3) このほか藤原与一先生が『日本方言学』(文法篇)、『日本語文法講座』(1.総論)、『日本語方言文法の世界』などでくり返し御指摘なさっている。

(注4) 『沖繩語辞典』の概説篇(P.81)の記述に基づく。

(注5) この番号は、地域方言を示す代表番号である。(1)は、南島方言、(2)は、九州方言を示す。

(注6) 平山輝男氏は、『琉球方言の総合的研究』の中で、

このmunuは名詞としての「もの」ではなく、感動的な表現としての kakjuru munuである。この事実は、琉球方言による生活者のごく自然な表現であって、つまり「書く」という行動を表現するための、客観的表現として、こういう結合がごく自然のうちに固まったものと考えられる。この形はつまり言い切りの形である。(同書P.16)

と説明されている。

[付記] 小論の大意については、第31回広島大学国語談話会(昭51.10)で発表した。

席上多くのかたがたから御教示を賜わった。また、稿を成すにあたっては、小林芳現、室山敏昭両先生に御指導いただいた。記して厚く感謝申し上げる。

——大学院博士課程後期——